

# 評価懸念と攻撃行動の関連性

— ソーシャルサポートの授受による関連性の差異 —

山本圭吾 関西大学大学院心理学研究科

太田仁 奈良大学社会学部

阿部晋吾 関西大学社会学部

The relationship between fear of negative evaluation and aggressive behavior:  
Differences in the relationship according to giving and receiving social support

Keigo YAMAMOTO (Graduate School of Psychology, Kansai University)

Jin OTA (Faculty of Sociology, Nara University)

Shingo ABE (Faculty of Sociology, Kansai University)

The purpose of this study was to examine the relationship between fear of negative evaluation and aggressive behavior. In addition, we also examined differences in the relationship according to giving and receiving social support. A questionnaire survey was conducted on 153 university students. The results showed that fear of negative evaluation directly suppressed verbal aggression, while fear of negative evaluation increased hostility, hostility increased anger, and anger increased physical and verbal aggression. In contrast, students with low social support found that there was no association between fear of negative evaluation and verbal aggression.

**Keywords:** fear of negative evaluation, aggressive behavior, hostility, given and received social support

## 問題と目的

攻撃行動とは、他者に対して有害な刺激を与えようと試みる行動と定義されている (Buss, 1971)。攻撃行動は様々な分類がされているが、Buss & Perry (1992) では身体的攻撃 (physical aggression)、言語的攻撃 (verbal aggression) に分類されている。「身体的攻撃」とは暴力反応傾向、暴力への衝動などの身体的な攻撃反応のことである。「言語的攻撃」とは議論好き、自己主張などの言語的な攻撃反応のことである。

そして、大淵 (1986) では、敵意があるほど人々

は攻撃行動を強く願望し、それを実行することも多いことが明らかにされている。さらに、大淵・小倉 (1984) によると、怒りが喚起されると9割の人は何らかの攻撃行動を行いたいと願望したということも示されている。さらに坂井・山崎 (2004) でも敵意や短気といった行動としては表に出ない攻撃である不表出性攻撃が身体的攻撃や言語的攻撃といった行動として表に出る攻撃である表出性攻撃の生起に影響を及ぼすということも明らかにされている。

また、自己評価が脅かされることが攻撃の原因になっていることも明らかにされている (Goldstein, 1975)。そのため、他者からの評価の過敏性と攻撃行

動との関連性を明らかにする必要があるだろう。そこで、「他者からの否定的評価に対する心配や、否定的に評価されるのではないかという予測に対する心配」と定義されている (Watson & Friend, 1969) 評価懸念を取り上げる。

評価懸念の特徴として、山本・田上 (2001) では、目の前に他者が存在するかしないかといった状況の違いはあまり関係がないこと、客観的に考えると不安を感じる理由は何もない場合でさえも生じることや他者に否定的に評価される材料を与えてしまったかどうかわからない場合でも生じることが指摘されている。熊切・渡部 (2017) によれば、評価懸念が高いほど、社会的な手がかかりの中でも否定的なものに注目しやすく、あいまいな対人状況を否定的に解釈しやすい傾向である「解釈バイアス」により相手の反応の原因を「敵意帰属」しやすことが示されている。さらに、敵意帰属バイアスに関する片岡 (1997) や戸田・渡辺 (2012) の研究によると、敵意帰属バイアスの高い者ほど他者に対して攻撃行動を示しやすことが明らかにされている。

これら一連の攻撃行動の生起過程は社会的情報処理モデルの枠組みから説明することも可能である。Crick & Dodge (1994) の社会的情報処理モデルは、対人的相互作用の場面で人は情報をどのように意思決定をするのかを6つの段階に分けてモデル化されている。最初の段階は「手がかりの符号化」である。他者と何らかの相互作用が起きたときにどの手がかりを受け取るかということである。第二段階は「手がかりの解釈」である。相互作用に至った相手の意図を何に帰属するかということである。第三段階は「目標の明確化または選択」である。相互作用の相手に何を求めるかであり、その相手とこれからも良い関係を維持したいのか、それとも関係を維持させたくないのかということである。第四段階は「反応の探索と構築」である。その目標を達成するためにどのような手段 (反応) があり得るかが、それまでの経験から得られた記憶の中から検索される。第五段階は「反応の決定」である。反応を実行したときにどのような結果になることが予想されるかが検討される。第六段階は「行動実行」である。評価懸念が高い人は他者からの否定的な評価を気にしているため、社会的な手がかかりの中でも否定的なものに注目しやすくと推測され、そして状況を他者の敵意に帰属してしまい、相手から敵意を向けられているから相

手に対しても敵意を向け、攻撃行動をとると考えられるだろう。

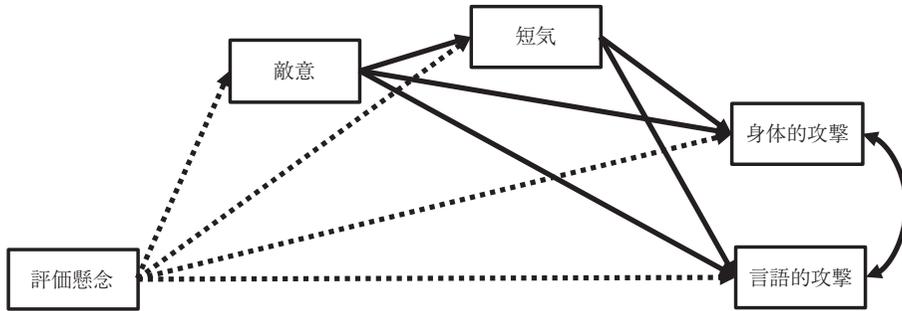
また、Twenge et al. (2001) の社会的排斥と攻撃の研究によると仲間外れにされ、他者と互恵的な関係を築くことができない状況になると攻撃的になることが示されている。さらに、DeWall et al. (2009) によると、社会的排斥が高まると、他人の中立的であいまいな行動を敵対的と評価し、攻撃行動を生み出すことが示されている。そこで、攻撃行動に影響を与える因子としてソーシャルサポートを取り上げ、ソーシャルサポートの提供・受容の両面から検討する。

ソーシャルサポートは、他者からの社会的支援に関する認知であり、Cobb (1976) によれば「社会的ネットワークにおける他者から愛され、尊敬され、価値あるものとみなされ、コミュニケーションのネットワークの中の一員であると信じさせてくれる、情報である」と定義されている。ソーシャルサポートの定義に関しては他にもいくつか示されているが、概括すれば他者から受けている援助に関する認知ということになるだろう。この定義から個人のソーシャルサポートについての認知はそのまま他者との互恵的な関わりの認知と同義となるだろう。そして、互恵的な人間関係を築くことが評価懸念と攻撃行動の関連性に与える影響を明らかにすることが必要であると考えられる。

以上から、要因間の関連を検討するために以下のようなモデルを想定した。まず「評価懸念」から「敵意」、「短気」、「身体的攻撃」、「言語的攻撃」のパスを設定した。「敵意」からは「短気」、「身体的攻撃」、「言語的攻撃」に、「短気」からは「身体的攻撃」、「言語的攻撃」に対してパスを設定した。なお、「身体的攻撃」と「言語的攻撃」との間には相関を仮定した (Figure 1)。そして、評価懸念が高いと攻撃行動は高くなるが、ソーシャルサポート授受が高い場合はこの関連性は弱まると仮説を立てた。

本研究の目的は評価懸念と攻撃行動の関連性において、他者を助け、また助けられているというソーシャルサポートの授受経験がどのように影響するかを明らかにすることである。つまり、他者からの評価が気になる人が、他者を助け、また助けられているという経験をするのが攻撃行動にどのような影響を及ぼすのかを検討することにより相互作用の現状の把握し、攻撃行動を防ぐことを目的とする。

Figure 1 本研究で想定したモデル



注) 点線はサポート授受高群において正の関連性が弱まると想定する。

### 方法

**実施方法および対象者** 2022年5月～6月にGoogle formを用いて質問調査を実施し、大学生153名（男性86名，女性62名，その他5名，平均19.86歳， $SD = 1.31$ ）から回答を得た。謝礼は提示していない。回答は無記名で行われ，実施時間は約5分であった。

**質問項目** 個人属性：性別，年齢，学年について回答を求めた。評価懸念：評価懸念尺度（山本・田上，2001）10項目のうち対象者の負担を考慮し，因子負荷量の高い方から5項目を用いた（ $\alpha = .89$ ）。選択肢は「1. まったく当てはまらない」から「4. とても当てはまる」の4件法であった。ソーシャルサポートの受容：大学生用ソーシャルサポート尺度（片受・大貫，2014）23項目のうち対象者の負担を考慮し，各因子の因子負荷量の高い方から3項目の計9項目を用いた（ $\alpha = .92$ ）。この尺度は「評価的サポート」「情報・道具的サポート」「情緒・所属的サポート」の3つの下位尺度からなるが，全ての尺度得点を合計することで総合的なソーシャルサポートの

測定ができる。選択肢は「1. 全く当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」の4件法であった。ソーシャルサポートの提供：大学生用ソーシャルサポート尺度（片受・大貫，2014）23項目のうちソーシャルサポートの受容の項目と同じ計9項目の質問項目の語尾を「～する」と能動態に調整し用いた（ $\alpha = .84$ ）。選択肢は「1. 全く当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」の4件法であった。攻撃行動：日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）（安藤他，1999）24項目のうち対象者の負担を考慮し，各因子の因子負荷量の高い方から4項目の計16項目を用いた。選択肢は「1. まったく当てはまらない」から「5. 非常によく当てはまる」の5件法であった。この尺度は「身体的攻撃」（ $\alpha = .82$ ），「言語的攻撃」（ $\alpha = .79$ ），「敵意」（ $\alpha = .77$ ），「短気」（ $\alpha = .74$ ）の4つの下位尺度からなっていた。

### 結果

評価懸念と攻撃行動の関連性を検討するため，相関分析を行った（Table 1）。評価懸念と敵意の間には有意な中程度の正の相関がみられ（ $r = .62$ ，

Table 1 各変数の記述統計量および相関係数

変数	M	SD	相関係数				
			1	2	3	4	5
1. 敵意	3.38	1.07					
2. 短気	2.89	1.05	.30**				
3. 身体的攻撃	2.34	1.07	.26**	.56**			
4. 言語的攻撃	2.90	0.92	.02	.36**	.35**		
5. 評価懸念	2.92	0.81	.62**	.21**	.19**	-.16	

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

$p < .001$ ), 評価懸念が高いと敵意が高いということが明らかになった。評価懸念と短気の間には有意な弱い正の相関がみられ ( $r = .21, p = .008$ ), 評価懸念が高いと短気が高いということが明らかになった。評価懸念と身体的攻撃の間には有意な弱い正の相関がみられ ( $r = .19, p = .019$ ), 評価懸念が高いと身体的攻撃が高いということが明らかになった。評価懸念と言語的攻撃の間には有意な関連はみられなかった。 ( $r = -.16, p = .053$ )。

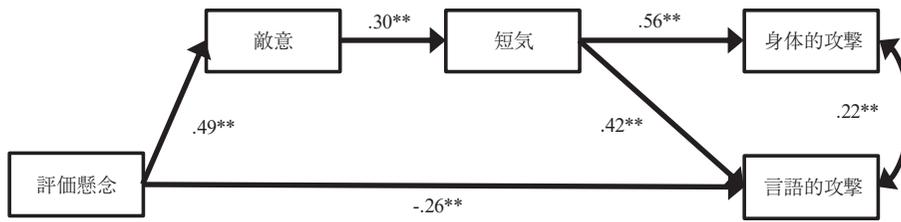
Figure 1 で想定したモデルについて, HAD (清水, 2016) を使用して構造方程式モデリングによるパス解析を行った。そして, 有意でないパスを除いていき, 最終的に得られたモデルが Figure 2 である。モデルの適合度指標の値は  $GFI = .99, CFI = 1.00, RMSEA = .00$  であり, モデルはデータに対して高い適合度を示したといえる。評価懸念は言語的攻撃に対しては有意な負の関連がみられ ( $\beta = -.26, p < .001$ ), 敵意に対しては有意な正の関連がみられ ( $\beta = .49, p < .001$ ), 敵意は短気に対して有意な正の関連がみられ ( $\beta = .30, p < .001$ ), 短気は身体的攻撃 ( $\beta = .56, p < .001$ ), 言語的攻撃に対して有意な正の関連がみられた ( $\beta = .42, p < .001$ )。

ソーシャルサポートの授受による差を検討するため, ソーシャルサポートの提供の得点とソーシャル

サポートの受容の得点を変量とし, Ward 法によるクラスター分析によって, 対象者を分類した (Table 2)。その結果, 2 クラスターが得られた。それぞれの特徴を明らかにするため, 各クラスターのソーシャルサポートの提供の平均値, ソーシャルサポートの受容の平均値を求め, クラスター間の  $t$  検定を行った。その結果, ソーシャルサポートの提供, ソーシャルサポートの受容のどちらも 0.1% 水準で有意な差がみられた。第 1 クラスターはソーシャルサポートの提供・受容の合計得点が有意に高かったため, サポート授受高群と命名し, 第 2 クラスターはソーシャルサポートの提供・受容の合計得点が有意に低かったため, サポート授受低群と命名した。

そして, サポート授受の高低群に分けたうえで多母集団同時分析を行った。高低群いずれにおいても有意でないパスを除いていき, 最終的に得られたモデルは Figure 3 であった。モデルの適合度指標の値は  $GFI = .97, CFI = .996, RMSEA = .046$  であり, モデルはデータに対して高い適合度を示したといえる。サポート授受高群の評価懸念は敵意に対して有意な正の関連がみられ ( $\beta = .61, p < .001$ ), 敵意は短気に対して有意な正の関連がみられ ( $\beta = .30, p < .019$ ), 短気は身体的攻撃 ( $\beta = .58, p < .001$ ), 言語的攻撃に対して有意な正の関連がみられたが ( $\beta = .52,$

Figure 2 評価懸念と攻撃行動の関連性



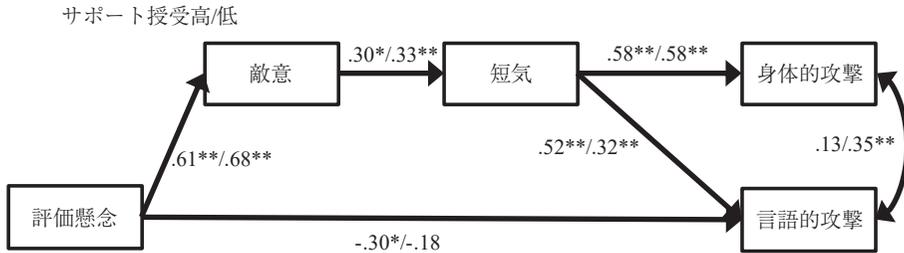
\*\* $p < .01$

注) Figure内の係数は標準化係数を示している。

Table 2 ソーシャルサポート授受の類型

	全体	サポート授受高群 ( $n = 61$ )	サポート授受低群 ( $n = 91$ )	$t$ 値
ソーシャルサポートの提供				
$M$	21.79	24.74	19.76	10.24 ( $p < .001$ )
$SD$	3.84	2.95	2.97	
ソーシャルサポートの受容				
$M$	28.69	34.49	24.74	18.76 ( $p < .001$ )
$SD$	5.99	1.93	4.37	

Figure 3 ソーシャルサポートの授受による差異



\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

注) Figure内の左側の数値はサポート授受高群の標準化係数, 右側の数値はサポート授受低群の標準化係数を示している。

$p < .001$ ), 評価懸念は直接的には言語的攻撃に対して有意な負の関連がみられた ( $\beta = -.30$ ,  $p = .019$ )。一方, サポート授受低群の評価懸念は敵意に対して有意な正の関連がみられ ( $\beta = .68$ ,  $p < .001$ ), 敵意は短気に対して有意な正の関連がみられ ( $\beta = .33$ ,  $p = .001$ ), 短気は身体的攻撃 ( $\beta = .58$ ,  $p < .001$ ), 言語的攻撃に対して有意な正の関連がみられたが ( $\beta = .32$ ,  $p = .002$ ), 言語的攻撃に対して有意な関連はみられなかった ( $\beta = -.18$ ,  $p = .062$ )。

## 考察

本研究の目的は, 評価懸念と攻撃行動の関連性を検討すること, 評価懸念と攻撃行動の関連性にソーシャルサポートの授受が与える影響について検討することであった。

### 評価懸念と攻撃行動の関連性の検討

評価懸念尺度と日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の各因子を用いてパス解析を行った結果, 評価懸念は言語的攻撃に対しては負の関連がみられる一方で, 敵意に対しては有意な正の関連がみられ, 敵意は短気に対して正の関連がみられ, 短気は身体的攻撃, 言語的攻撃に対して正の関連がみられた。つまり, 評価懸念は言語的攻撃を抑制できるが, 評価懸念は敵意を高め, また敵意が短気を高めることによって, 身体的攻撃や言語的攻撃といった表出性攻撃につながるという結果が示された。評価懸念は直接的には言語的攻撃を抑制できるが, 間接的には言語的攻撃を促進するという結果になった理由は2つ考えられる。

第一は, 評価懸念の高さは, 周囲の様子に気を配りながら周囲に程よく合わせることのできる柔軟性を有しているため (岡田・渡田, 1992), 直接的には

言語的攻撃を抑制することができるが, 他者に対して敵意を向け, 怒りが喚起されることによって行動をコントロールすることが難しくなってしまう言語的攻撃につながってしまったと考えられるだろう。

第二は, 「日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ)」の因子である「言語的攻撃」は, 自己主張や議論好きを測定する項目の内容であり (安藤他, 1999), 他者からの否定的な評価を恐れることで自己主張をしにくくなっていると考えられるだろう。

以上から, 評価懸念が高いと攻撃行動は高くなるという仮説は一部の関連性においてのみ支持されたといえる。

### 評価懸念と攻撃行動の関連性についてソーシャルサポートの授受による差異の検討

クラスタ分析によってサポート授受の高低群に分けたうえで多母集団同時分析を行った結果, 高低群共通の結果としては, 評価懸念は敵意に対して正の関連がみられ, 敵意は短気に対して正の関連がみられ, 短気は身体的攻撃, 言語的攻撃に対して正の関連がみられた。つまり, 評価懸念は敵意を高め, また敵意が短気を高めることによって, 身体的攻撃や言語的攻撃といった表出性攻撃につながるということが示された。また, サポート授受高群においては, 評価懸念は言語的攻撃に対して負の関連がみられた。つまり, サポート授受高群は評価懸念が高いと他者からの評価を気にするため言語的攻撃は抑制しやすいことが示された。一方, サポート授受低群においては, 評価懸念は言語的攻撃に対して負の関連はみられなかった。これは, サポート授受低群は他者とのつながりが希薄なために抑制力が働きにくいということが考えられる。

以上から, 評価懸念が高いと攻撃行動は高くなる

がソーシャルサポート授受が高い場合はこの関連性は弱まるという仮説は支持されなかった。

### 本研究の意義と課題

本研究の結果より、評価懸念が攻撃行動に結びつくまでのプロセスが明らかになった。ソーシャルサポート授受高群においては、評価懸念は言語的攻撃を抑制させたが、他者に敵意を向け、怒りが喚起されることによって身体的攻撃や言語的攻撃につながる可能性を示した点で一定の意義があるといえるだろう。その一方で、ソーシャルサポート授受低群においては評価懸念が言語的攻撃を抑制することができるという結果が得られなかった。本研究では評価懸念と攻撃行動の関連のみを検討しているが、評価懸念と向社会的行動との関連を検討することで評価懸念についてさらに理解を深めることができると思われる。

今後の課題としては、本研究では質問紙で攻撃行動を測定しており、実際の行動では検討していない。これについては、現実可能性を高めるために実験を行い検討する必要があるだろう。また、本研究では攻撃行動の対象がサポート授受の可能性のある親密な他者なのか、あるいは外集団なのかといった対象の特定がなされていない。今後の研究においては攻撃行動の対象による差異についても検討の必要があるだろう。また、本研究ではサポート授受の対象者として友人を設定したが、家族や教師などサポート授受の対象者の違いによっても影響があると考えられるため、今後の研究ではそのことを考慮に入れた検討が必要であるだろう。

### 引用文献

- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392. <https://doi.org/10.4992/jipsy.70.384>
- Buss, A.H. (1971). Aggression pays. In J.L.Singer (Ed.), *The control of aggression and violence*. New York: Academic Press, 7-18.
- Buss, A.H., & Perry, M. (1992). The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.63.3.452>
- Cobb, S. (1976). Social support as a mediator of life stress. *Psychosomatic medicine*, 38, 300-314. <https://doi.org/10.1097/00006842-197609000-00003>
- DeWall, C. N., Twenge, J. M., Gitter, S. A., & Baumeister, R. F. (2009). It's the thought that counts: The role of hostile cognition in shaping aggressive responses to social exclusion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 45-59. <https://doi.org/10.1037/a0013196>
- Goldstein, J.H. (1975). *Aggression and crimes of violence*. New York: Oxford University Press.
- 片岡 美菜子 (1997). 攻撃及び非攻撃幼児の敵意帰属に及ぼすムード操作の効果 教育心理学研究, 45, 71-78. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.45.1\\_71](https://doi.org/10.5926/jjep1953.45.1_71)
- 片受 靖・大貫 尚子 (2014). 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—評価的サポートを含む他因子構造の観点から— 立正大学心理学研究年報, 5, 37-46. <http://hdl.handle.net/11266/5301>
- 熊切 実乃里・渡部 玲二郎 (2018). 評価懸念と社会的情報処理理論における符号化・解釈の偏りとの関連 茨城大学教育学部紀要, 67, 753-772. <http://hdl.handle.net/11266/5301>
- 栗原 彬 (1996). やさしさの存在証明—若者と制度のインターネットフェイス—増補新版 新曜社
- 岡田 守弘・渡田 典子 (1992). 評価懸念および自己制御感から観た児童の学校不適応感の測定について 横浜国立大学教育紀要, 32, 151-187. <http://hdl.handle.net/10131/2361>
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363. [https://doi.org/10.926/jjep1953.43.4\\_354](https://doi.org/10.926/jjep1953.43.4_354)
- 大淵 憲一・小倉 左知男 (1984). 怒りの経験(1)—Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況— 犯罪心理学研究, 22, 15-35. [https://doi.org/10.20754/jjcp.22.1\\_15](https://doi.org/10.20754/jjcp.22.1_15)
- 大淵 憲一 (1986). 質問紙による怒りの反応の研究—攻撃反応の要因分析を中心に— 実験社会心理学研究, 25, 127-136. <https://doi.org/10.2130/jjesp.25.127>
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店
- 坂井 明子・山崎 勝之 (2004). 攻撃性概念の細分化と形成過程 美作大学・美作大学短期大学部紀要, 49, 1-7. <https://mimasaka.repo.nii.ac.jp/records/241>
- 櫻井 茂男・葉山 大地・鈴木 高志・倉住 友恵・萩原 俊彦・鈴木 みゆき・及川 千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動、攻撃行動との関係 心理学研究, 82, 123-131. <https://doi.org/10.4992/jipsy.82.123>
- 沢崎 達夫 (2006). 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係 目白大学心理学研究, 2, 1-12. <https://mejiro.repo.nii.ac.jp/records/101>
- 千石 保 (1991). “まじめ”の崩壊：平成日本の若者たち サイマル出版会

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>

田中 陽子・栗山 和広・園田 順一 (2003). 高校生の無気力と攻撃性の関連性—「学校雰囲気」「教師サポート」「両親サポート」「友人関係」が与える影響について—九州保健福祉大学研究紀要, 4, 77-82. <https://doi.org/10.15069/00000483>

戸田 まり・渡辺 恭子 (2012). あいまいな攻撃に対する解釈と対処行動の発達—社会的情報処理の視点から—発達心理学研究, 23, 214-223. <https://doi.org/10.11201/jjdp.23.214>

富田りさ・酒井佳永 (2022). 女子大学生における時間的展望体験とソーシャル・サポートが獲得的レジリエンスに与える影響 跡見学園女子大学心理学紀要, 4, 169-180. <https://atomi.repo.nii.ac.jp/records/4107>

Twenge, J.M., Baumeister, R.F., Tice, D.M. & Stucke, T.S. (2001). If you can't join them, beat them: Effects of social exclusion on aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1058-1069. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.81.6.1058>

上野 行良・上瀬 由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 21-28. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.42.1\\_21](https://doi.org/10.5926/jjep1953.42.1_21)

Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-457. <https://doi.org/10.1037/h0027806>

山本 淳子・田上 不二夫 (2001). 評価懸念に関する文献研究と今後の課題 教育相談研究, 39, 37-46.

山本 淳子・田上 不二夫 (2001). 評価懸念尺度の作成 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 180. [https://doi.org/10.20587/pamjaep.43.0\\_180](https://doi.org/10.20587/pamjaep.43.0_180)

## 付記

本論文は第64回社会心理学会大会において発表された内容を再構成したものである。発表抄録は、日本社会心理学会第64回大会発表論文集に掲載されている。

## 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 著者分担

第1著者が本研究を発案し、調査の実施、データ分析

を行い、草稿をまとめた。第2著者は、研究デザインと分析計画に助言を行った。第3著者は、一部の分析の修正および草稿の修正を行った。最終稿は三人で確認した。

## 著者紹介

山本圭吾 関西大学心理学研究科 M1。2022年3月奈良大学社会学部心理学卒業、学士(社会学)。関西大学心理学研究科博士前期課程に進学し、在籍中。

太田 仁 奈良大学社会学部教授。2002年関西大学大学院社会学研究科修士、博士(社会学)。梅花女子大学教授を経て、2019年より現職。専門は社会心理学で、教育場面における援助要請態度の構造と態度の形成要因に関する研究を主に行う。著書に『家族をつなぐカウンセリング』(金子書房)、『援助要請の心理学』(金子書房)など。

阿部晋吾 関西大学社会学部教授。2005年関西大学大学院社会学研究科修士、博士(社会学)。梅花女子大学講師、准教授、教授を経て、2019年より現職。専門は社会心理学で、怒りや叱りが人間関係に及ぼす影響に関する研究を主に行う。著書に『支えあいからつながる心』(編著、ナカニシヤ出版)、『読んでわかる社会心理学』(共著、サイエンス社)、『Big Five パーソナリティ・ハンドブック』(編著、福村出版)など。

## 要旨

本研究では、評価懸念と攻撃行動との関連性を検討することを目的とした。さらに、評価懸念と攻撃行動との関連性についてソーシャルサポートの授受の高低による関係性の差異の検討も行った。大学生153名に対して質問調査を行った。その結果、サポート授受高群において、評価懸念は言葉の攻撃を直接的には抑制するが、他者に対して敵意を向けることで怒りが喚起され、怒りが喚起されることで身体的攻撃および言語的攻撃につながることを示された。一方、ソーシャルサポートの授受低群では、評価懸念と言葉の攻撃の間には関連がみられなかった。

キーワード：評価懸念、攻撃行動、敵意、ソーシャルサポートの授受

